

饗庭秀男氏抑留体験を語る その2 抑留・その後

インタビュー実施：平成22年8月26日

場所：東京九段 全国抑留者協会事務局

語り手：饗庭秀男氏

1923年生まれ。製鉄メーカーに勤務。昭和19年に現役入隊。戦後1945年8月から1949年7月までソ連に抑留。帰国後同製鉄メーカーに再就職。その後ソ連抑留全国強制抑留者協会理事。全国強制抑留者協会事務局長として、機関誌の発行、慰霊訪問、中央慰霊祭、地方慰霊祭、展示会、補償を目的とした日露シンポジウムの開催、抑留者からの相談事業、語り継ぐ労苦の会の開催などに当たる。
<http://zaidan-zenyokukyo-com.ssl-xserver.jp/>

構成／和文英訳／聞き手：榊原晴子

東京都出身カリフォルニア大学東アジア言語文化学科日本語専任講師

平成27年に「日本人のシベリア抑留」について日英両語のウェブサイトを出版。

japaneseinsiberia.ucdavis.edu

インタビュー2 より抜粋：

私が現役入隊したのが19年の2月、大阪、高槻のこうへいたいに入隊してすぐに 満州の方に転属になりました。

その後は、ロシア人の方の指示に従って満州の収容所に入っておったわけなんです。8月から11月まで満州ですごしておったわけです。

11月の末に貨車に入れられてシベリアの方へ送られました。12月の4日に現在で言いますと、ゴチク、ハバロフスクなんですけれど、ハバロフスクの217収容所なんですけど、それから抑留の各事業、あるいは作業に従事したと、そういう風な状況で、終戦から11月ぐらいまでは満州の収容所の方へ収容されて、ハバロフスクの方へ貨車で送られたというのが状況でございます。

私が実際に従事した作業いいますと、作業種類は20種類以上あるんですけど、伐採、製材、道路補修、トラック貨車の積み卸し、それに収容所の内務授業と、炭坑だとか護岸工事、機械作業など、約20種類です。

一番つらかったのは体力がないということです。病気ではなく、糧末問題。それと病状扱い。

一番問題になってくるのは、作業ノルマの問題があるんですよ。作業ノルマで追っかけられるというのが一番きついです。

延長するだとか、時間内に終わらない時には、収容所によっては夜まで引っ張りだされる、というそういうようなことが非常に苦痛になりますね。体力がつかない食料の問題。作業量がオーバーする問題。そのようなことが相当あります。

24年の7月29日にナホトカ出まして、舞鶴についたのが8月2日です。

一緒におる連中がね。栄養失調のために亡くなって行く。埋葬のためには運搬せえ、と。こういう風なことが目の前にはあるわけですよ。それが3年4年となって来ますとね、まあ1年2年目には、家のことも相当頭に来ましたがねえ、まあ、なるようにしかならんだろうというふな感じが、私は強かったですね。

私自身は一つの考え方ですが、自分だけが苦勞したという気持ちだけには絶対なっちゃいかんぞと。同じような苦勞を、内地におった人間もしているんじゃないかと。

両親もね、心配はせんならん、日常の生活はあるは、爆撃は受けるわ、疎開がどうだこうだ、そういう風な苦勞をやっぱりしてきてる、と帰って聞いておりますわね。

私はね、昔の歴史は知ってほしいと思うんです。しかしね、時代が変わってますからね。今の時代に即応した形で生きるのが今の方の生き方ですから。何も過去においてこういう風なおかげがあったとかどうだったとか、という風なことじゃなくてね、こういうことがあったなあ、ということだけは忘れ

てもらいたくはないけど、じゃ、今の生活に即恩返しをせよ、というような物の考え方する必要ないんじゃないかと。時代が変わっていますからね。

インタビュー2

榊原： では、シベリア抑留経験について伺います。まず、第二次世界大戦で軍隊に入隊されてから敗戦を迎え、シベリアに抑留されるまでの経過をお話いただけますか。

饗庭： 私が現役入隊したのが19年の2月、大阪、高槻のこうへいたいに入隊してすぐに満州の方に転属になりました。満州はこうあん州のへいよという部隊に入ったわけなんです。それで私は幹部候補生試験に通って高官ということで軍務に服していたんですが、高官の場合には特別養成学校があるもんなので、簡単にいえば、予備士官学校だったんですが、途中で私、病気があったものですからちょっと送れましたけど、20年の7月のはじめの頃に学校に行きまして、終戦が8月15日なものですからその終戦の時には戦局がおかしいということで、新京の方の学校へ移ると、列車でハルピンまで来た所で終戦証書を見たわけなんです。

饗庭： その後は、ロシア人の方の指示に従って満州の収容所に入っておったわけなんです。2000人単位で現地の方へ送られていっている、その当時はどこへ送られているか知らなかったんですけど、私がおりましたハルピンの収容所から出ましたのが20年の11月です。8月から11月まで満州ですごしておったわけです。

饗庭： 遅れた理由は私らが高兵学校という特別な部隊におった関係上、殆ど最後ですが、11月の末に貨車に入れられてシベリアの方へ送られたと。途中、どういう経過で言ったかということについては、貨車ですから、外の状況は全然わからなかったんです。12月の4日に現在で言いますと、ゴチク、ハバロフスクなんですけれど、ハバロフスクの217収容所なんですけど、それから抑留の各事業、あるいは作業に従事したと、そういう風な状況で、終戦から11月ぐらいまでは満州の収容所の方へ収容されて、ハバロフスクの方へ貨車で送られたというのが状況でございます。

榊原： それではシベリア抑留中に経験なされた強制労働について、お話いただけますか。

饗庭： 私が実際に従事した作業いいますと、作業種類は 20 種類以上あるんですけど、伐採、製材、道路補修、トラック貨車の積み卸し、それに収容所の内務授業と、炭坑だとか護岸工事、機会作業など、約 20 種類。

饗庭： 収容所によっては期間によって長いものもありますが、私は 6 回変わった。特殊な盲腸をやっている。シベリアで2回盲腸をやっているんで、そういった手術の後は軽い作業に回される。退院したあとは、もとの収容所に戻るのではなく、たらない収容所に回される。そうすると、そこで受け持っている主力が伐採、製材などの事業の場合は、それの方に従事させられる。そのために、作業も色々変わっています。

饗庭： 一番つらかったのは体力がないということです。病気ではなく、りょうまつ問題。それと病状扱い。目に見えない問題の場合は認めてくれないんですよ。熱があるんだ、ということになると病人扱いはするんですけど、神経痛、りょうまちが痛いなどは、健康体と見られちゃうわけなんですよ。で、そういう連中で作業に出たら、苦痛なんです。普通ならね、かばってやれるんですけど、かばう本人がやっぱり弱ってますんでね。

饗庭： 一番問題になってくるのは、作業ノルマの問題があるんですよ。作業ノルマで追っかけられるというのが一番きついです。というのは、普通の常識で作っているノルマは別にあるんです。そうじゃなくて、監督をしているのが、囚人関係。すると、自分の監督をしている所を効率よくするために、ノルマの内容を変えよるわけです。

饗庭： それに従来だったら 100%でも、やっこさんだったら 120%というノルマで 100%とした場合、105%のノルマを達していたら、普通のノルマは達しておるのですが、5 時で作業が終わっても、120%には達していないので、ひっぱたかれるわけですよ。

延長するだとか、時間内に終わらない時には、収容所によっては夜まで引っ張りだされる、というそういうようなことが非常に苦痛になりますね。体力がつかない食料の問題。作業量がオーバーする問題。そのようなことが相当あります。

饗庭： ただ私はね、これはちょっと傾向としては違うんですが、私は技術があったんですよ。私、現役で入る前にですね、そろばんの先生しとったんですよ。数字というのは、シベリアへ来ている警戒兵というのは、非常に程度が低いんです。流刑地ですからね、優秀なやつは来てないんです。やっこさんら非常に数字が弱いもんですからね、数字の神様みたいな扱いされていた時期があるんです。こっちにしてみたら何でもないことですよ。でも、そういう風なことで、作業ちょっと変わって、入院した後だから、まだ続いているんだ、ということで、色々内務的な仕事をしたケースが非常に多いんです。

饗庭： 正式に言いますと、私は被服係やとったんです。それで、高官の目を盗んで、とんでもない制服になっているやつは、交換してやれる、というようなことがあった。そういうことがやれたし、またやってきたしということで、私自身は多少重労働の期間が他の方にくらべると少なかったのかもわかりません。

榊原： シベリア抑留を終えて、日本へ帰還されたのは何年ですか。

饗庭： 24年の7月29日にナホトカ出まして、舞鶴についたのが8月2日です。船上で、多少闘争問題がありまして、降りたのは8月4日です。ですから復員は8月4日ということになります。

榊原： 日本の土を踏む直前と、踏んだ時は、どんなことを思われましたか。

饗庭： 今から考えますと、ああだこうだと言えるかもしれませんが、実際はボオツとしていましたね。どうなるんだろうか、ということを見ると、先のこと、現在のことなどは、あまりピンと来なかったです。それで、こちらに帰ってから舞鶴の船の上で見えても、いい言葉でいったら、国の山や川だと、こういうけど、私はただぼうっと見てましたね。

饗庭： 本当にやれやれと考えたのは、私の両親が迎えに来ておったんです。船の上からじっと見ておると、小さな小舟をかりて明優丸の周りをぐるぐる回っている舟があるんです。甲板が高いののでよく見えなかったんですけど、どうも親父の面影に似ているなあと、ということで目をじっとこ

らして、まあ、向こうもわかったということと見えて、まあ6年7年会ってなかったですけど、船をとめて声を出しても聞こえませんし、

でも、船をとめた時に、ああ、親が来ているんだなあ、とやれやれ帰って来たんだなあ、と、そっから本当の感触出ましたね。それまではね、舞鶴に着く以前も、どうせまたどこかへ、という気もあるわけです。そらあ、ナホトカで乗った時に、日本の看護婦さんやとか、船員の方もおられたけど、どうも疑心暗鬼な感じでしたね。ですから、着いてもまだぼおっとしていましたね。

榊原： ご自分は生還されると、思っておられましたか。

饗庭： 3年ぐらいまではね。何としても帰れるやろうと。時々情報は入るんです。ダモイのために今度はだれそれを呼び出すとか言って、ええやつから帰っちゃうんですがね、本当に帰ったかどうかということはピンと来ません。でも一緒におる連中がね。栄養失調のために亡くなって行く。埋葬のためには運搬せえ、と。こういう風なことが目の前にはあるわけですよ。それが3年4年となって来ますとね、まあ1年2年目には、家のことも相当頭に来ましたけどねえ、まあ、なるようにしかならんだろうというふな感じが、私は強かったですね。

饗庭： それともう一つありますのはね。病院に入ったり出たりしますとね、どこへ収容所へ入れられるかわからんわけ。それと付き合う人間ちゅうのはいないわけですね。何べんも変わりますから。元のところへ戻るわけやない。あんまり話し相手もなかったと。ということも一つの原因かもわからんですけど。まあ、一年二年はただ帰りたい帰りたいの一心ですよ。三年になると、まあなるようにしかならんのとちゃうかと、周りでは倒れていきよると。それがね、舞鶴着いた時でもぼおっとしとったと。そりゃ途中でね。日本の看護婦さんの顔は見えますけどね。なんかうろうろ乗ると。たいした甲板じゃありませんでしたけど、まあ出会うことはありましたよね。でも、嬉しかったなあ、という感じはおこってなかったですね。

榊原： その後は、どのようなお仕事に携わって来られましたか。

饗庭： これがまた一つ問題がありまして。私は入営する前に、製鉄メーカーにおったんです。その前に銀行に若干おったことがあったんですけどね。いわゆる動員令がかかると、いわゆる軍事産業の方に手伝いに回されるということがありましてね。鉄鋼産業にうつっておれ

ば、そういうのがないということで、親戚にそこへおった者がありましたんで、そちらへ移って、そこから、私は入営したわけなんです。復員した時に復職できるものだと思って言ったんです。おじが役員をやっていたので、呼ばれて会社へ行ってみたけど、社長がどうしても復職を許可せんというわけなんです。

饗庭：なぜでしょうかと聞いたら、23年に復員した連中が、新聞にも出たんですけど、京都駅で騒いだんです。共産党本部へ皆で行こうとかへちまたとか言ってみなで騒いだ。赤というレッテルがありますわな。そのために社長が非常にこわがって、翌年私帰って来てますからね。また騒がれたんじゃ困ると、いうふうなことで、すぐうんといわなかったんです。

それで叔父が役員をしてますから、こいつがそういうふうなことで騒ぐようだったら、俺と一緒に辞職するからこいつを復職させてやってくれと、そういうことで戻ったので、本来だったら、復職できてなかったと思います。それだけに、目の届く所にしかお前はおかんぞと。で、営業関係でおじきはやっておったもんだから、営業関係で3年と。目の届く所に置かれたというケースがあります。その時の反応で、組合が当時は活発に動き始めたんですが、その参加もほどほどにしとけと。それ上手にやろうと。それでも60近くになるまでは製鉄メーカーでずっと続けました。

榊原：それから半世紀が経過した今現在、ご自身のシベリア抑留経験を回顧されて、どのようなことをお考えになっておられますか。

饗庭：私自身は一つの考え方ですが、自分だけが苦勞したという気持ちだけには絶対なっちゃいかんぞと。同じような苦勞を、内地におった人間もしているんじゃないかと。ということを見ると、まあ、状況の説明はいいですけどね。同情を求めるような形になる、俺だけが苦勞したのだ、ということは一切私は感じたくない。まあ手近な所ではね、私は兄弟はありません。始めからね。両親もね、心配はせんならん、日常の生活はあるは、爆撃は受けるわ、疎開がどうだこうだ、そういう風な苦勞をやっぱりしてきてる、と帰って聞いておりますわね。で、お互いじゃないかと、同情を押し付けるようなことだけはしたくないけど、聞く話はね、皆さん聞いてやって、ああいうことがあったということをお忘れんようにはしてほしいです。けど、あえてこちらから進んで同情を求めるような考え方は私はしたくない。

饗庭：で、今もちょこちょこここへ経験者の方の話が入ります。ちょくちょく電話もかけて来ます

けどね、あんたの苦労もようわかるけど、俺もおんなしやけど、自分だけがという考え方でおるとね、自分自身がね、みじめになるよと。そうじゃなくて、家族もみな一緒に苦労したんだから、という風な気持ちを持てばね、自分自身が気が楽にならへんかと。俺が俺がというような事だけは、お互いやめようやないかと。そういうことであるだ、と言うなら私はそれでもかまへんけど、私は話し合いの中ではね、お互い様じゃないか、という風にもっていくのがね、自分自身のためにもなるんじゃないですか、というような話し合いしているんです。そう思うてます。

榊原： それでは、今ご自身の経験から、次の世代に対して、どのようなことをお伝えに
なりたいですか。

饗庭： 私はね、昔の歴史は知ってほしいと思うんです。しかしね、時代が変わってますからね。今の時代に即応した形で生きるのが今の方の生き方ですから。何も過去においてこういう風なおかげがあったとかどうだったとか、という風なことじゃなくてね、こういうことがあったなあ、ということだけは忘れてもらいたくはないけど、じゃ、今の生活に即恩返しをせよ、というような物の考え方する必要ないんじゃないかと。時代が変わっていますからね。時代に合うような生活なさって、また時代に合うような考え方もたれたらいいんじゃないですか。我々の年代とは多少意見が違うかもしれませんが。実際私はそう思うて話はしてますけどね。

榊原： 本日は大変貴重なお話を、ありがとうございました。

